Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-10-14

孤独感の関連要因に関する日中比較 ： ISSP2017を用いた分析

林, 萍萍

(Citation)
国際文化学,36:93-115

(Issue Date)
2023-03-20

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/0100479398

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100479398

KOBE UNIVERSITY

孤独感の関連要因に関する日中比較 1)

—ISSP2017 を用いた分析—

A Cross-Cultural Comparison of Factors Associated with Loneliness Between Japanese and Chinese：

Analysis Using Data from ISSP2017

林萍萍
LIN　Pingping

Summary

As the impact of the COVID-19 pandemic, the problem of loneliness and social isolation in Japan has become even more serious. In this study, we use data from the International Social Survey Programme (ISSP) 2017 survey to compare the factors associated with loneliness in Japan and China. Specifically, we examined effects of three types of factors: demographic factors (gender, age, education level, household composition, etc.), social factors (social network, frequency of eating out, frequency of contact with parents and friends, etc.), and personal factors (general trust, self-efficacy, etc.). The results suggest that (1) Chinese people felt more strongly than the Japanese that they had no one to talk to. (2) In both Japan and China, gender differences in factors associated with loneliness were found. (3) In both Japan and China, the stronger the feeling of frustration, the stronger the feeling of loneliness. (4) The effect of age on loneliness was significant in Japan, but not in China. In China, people who live alone are more likely to feel lonely, whereas this was not the case in Japan. (5) Only in China, demands from families or friends, the experience of being angry with a significant other had an impact on loneliness. In the discussion, we mainly discussed the differences between Japan and China.

キーワード

孤独感、二次分析、社会調査、日中比較、International Social Survey Programme

はじめに

2020 年以降の新型コロナウイルス感染症の流行は、人々の生活、働き方、所得、心身の健康などに大きな影響を与えていることが多くの大規模社会調査により繰り返し報告されている（内閣府 2020a, 2020b, 2021a, 2021b, 2022; リクルートワークス研究所, 2020)。コロナ禍の影響が続く中、外出自粛やソーシャル・ディスタンスをとるように規制されていることで、他者とのつながりは断絶せざるを得ず、人々が社会的孤立に陥り、孤独感を感じやすい懸念が高まっている。こうした状況を背景として、日本では、2021 年 2 月 19 日に内閣官房に孤独・孤立対策担当室を設置し、イギリスに次ぐ世界で 2 カ国目の任命となっている。孤独が個人の問題だけでなく、国を挙げて取り組むべき課題であることがうかがえる。このような背景をもとに、コロナ禍以降、日本人の孤独・孤立の実態を捉える全国調査が数多く実施された。以下には全国で実施された大規模調査の結果を概観する。

2021 年 5 月に日本の全国 20 代～80 代の男女 2,204 人を対象に実施した調査では、全体では約 4 割の人が孤独感を感じていること、そのうち 20 代～30 代の若年層の 2 人に 1 人、既婚者や一人暮らしでない人も 3 人に 1 人が日常において孤独感を感じていることが報告されている（野村総合研究所, 2021)。また、2021 年 12 月に日本在住の満 16 歳以上の個人約 2 万人を対象に実施した孤独・孤立の実態把握に関する調査では、約 4 割の人は、孤独感を「しばしばある・常にある」と感じており、男女ともに 30 歳代が最も多かったことがわかった（内閣官房, 2022)。同調査では、孤独感を感じていると答えた人の半数以上がその期間を 5 年以上と報告しており、コロナ禍前からすでに孤独状態にあることがみてとれる。さらに、2022 年 2 月に日本在住の約 3000 人を対象にした調査においても、約 4 割の人が孤独感を抱えていることが報告されている（特定非営利活動法人 あなたのいばしょ, 2022)。

一方、コロナ禍前では、孤独感に関する検討は、高齢者に焦点を当てるものが多く、全国規模の調査がほとんど行われていない。2017 年 10 月～11 月に、日本全国 18 歳以上の男女 1609 人を対象に実施した調査では、過去 1 か月の間に、約 15%の人が孤独感を感じていると報告されており（村田, 2018)。このように、コロナ禍前では、孤独感を感じている日本人は 2 割を下回っているのに対して、コロナ禍後ではいずれの調査においてもその割合が 2 倍となっており、コロナ禍をきっかけに、日本人の孤独のリスクが増加していることが示唆された。また、コロナ禍から 2 年以上経った時点においても、日本人の孤独感はほとんど減少していないことが明らかになった。さらに、若年層の孤独感の深刻さが浮き彫りになった。

ところが、孤独感は、日本だけでなく世界で注目されている社会問題と言っても過言ではない。国際比較という視点から、日本社会における孤独感はどのような特徴がみられるのか。カイザー・ファミリー財団（Kaiser Family Foundation）は 2018 年 4 月～6 月に、アメリカ、イギリスと日本の 18 歳以上のそれぞれ 1000 人程度（計 3000 人程度）を対象に、孤独と社会的孤立の意識調査を行ったところ、「常に」または「頻繁に」孤独感を感じている人の割合は、アメリカとイギリスでは 2 割程度であり、日本では 1 割となっている。ところが、孤独感を感じている人の中で、10 年以上孤独感を感じる人の割合について、アメリカ

とイギリスでは 2 割であり、日本では 35%と圧倒的に高い（DiJulio et al., 2018）。

しかしながら、孤立・孤独の問題は、決してコロナ禍で突如顕在化になったのではなく、日本社会で個人化が進展してきた 1990 年代後半から 2000 年代にかけて問題視されるようになったと指摘されている（石田, 2022）。上述の複数の社会調査の結果を踏まえて、日本では、孤独感を感じる人は問題が長期化する傾向があることが示唆された。どういった層において、孤独感を感じやすいのか、孤独感に関連する要因を明らかにすることが喫緊の課題といえよう。本稿では、孤独感の定義、孤独感の関連要因や孤独感の文化差に関する先行研究を概観した上で、国際比較研究という視点から日本人の孤独感の関連要因の特徴を検討する。一方、本研究では、コロナ禍における孤独感の文化比較研究ではなく、コロナ禍で多くの制限があり、新規のデータの収集が困難な中で、既存の社会調査のデータを用いて日本人と中国人の孤独感を比較検討する。

孤独感の定義

孤独感と似ている概念として「孤立」がしばしば取り上げられる。孤独感は個人の主観的な基準で決定され、「家族やコミュニティとはほとんど接触がない」という社会的なつながりの客観的な欠如を示す「社会的孤立（social isolation）」（Townsend, 1968）とは区別される。一方、孤独感の主観性と多様性によって、これまで孤独感をさまざまに定義されており、いまだに統一されていない。ここでは、代表的な定義をとりあげる。

Sullivan（1953）は、孤独感を、「人間への親密さ、人間関係への親密さの要求が十分満たされないことに関わる過度の不快感を伴った衝動体験である」と定義している。

Weiss（1973）は、孤独感は一人でいることではなく、明確に必要とされる人間関係がないことによって引き起こされると述べている。また、Weiss（1973）は、孤独感を、職場や学校での人間関係といった社会的関係の欠如として知覚される「社会的孤独感（social loneliness）」と、パートナーや親子といった親密なコミットメント関係の欠如として知覚される「情緒的孤独感（emotional loneliness）」の 2 つに分類している。

Chelune, Sultan, & Williams（1980）は、孤独感を「対人関係の欠如に対する認識に関連する主に主観的な経験である」と定義している。

Perlman & Peplau（1981）は、孤独感を「仲間づきあいの欠如あるいは喪失による、主観的な好ましくない感情であり、本人の置かれた社会的関係性の量及び質にずれがある時に生じる」と定義している。孤独問題を積極的に取り組んでいるイギリスでは、Perlman & Peplau（1981）の定義を用いている。

このように、孤独感の定義は多くの研究者によってなされているが、それらの定義に共通している点として、Peplau & Perlman（1982）は、孤独感は、「人の社会的関係の欠如から生じるものである」、「主観的な経験であり、客観的な社会的孤立と異なる」、「不快で苦悩を与えるものである」の 3 点をあげている。

一方、孤独感が必ずしもネガティブな経験とは限らないと主張する研究者もいる。Moustakasu（1961）は、では「孤独は、人に人間性を保持させ、広げさせ、深めさせる、人間たる経験である」と捉えている。また、落合（1999）は、淋しい孤独感から明るい孤独感まで、孤独感を広く捉えている。さらに、大東・岩元（2009）では、個人が孤独をどう捉

えるかを検討したところ、孤独に対して否定的な捉え方をする「否定的評価」、孤独を自己成長に資するものと捉える「自己成長機能」、孤独に対して肯定的な捉え方をする「肯定的評価」の 3 つの因子を抽出した。ここでの孤独感に対する「肯定的評価」因子には、「孤独は楽しい」「孤独は楽だ」「孤独は落ち着くもの」などの項目が含まれている。

孤独感の関連要因

孤独感についての研究において重要なテーマの一つが、人を孤独にしやすい出来事や、孤独になりやすい人の特徴などといった孤独感の関連要因に関する検討である。どのような属性の人々が孤独感を感じやすいのかについて、これまで多く検討されてきた。それらの要因を整理すると、人口統計学的要因、社会的要因、個人的要因の 3 つにまとめることができる。

まず、人口統計学的要因についてまとめる。性差については、男性よりも女性のほうがより孤独感を感じやすいと報告する研究（Vozikaki et al., 2018）もあれば、男性のほうがより孤独感を感じやすいと報告する研究もある（呉他, 2018; Barreto et al., 2021）。さらに、性差がないと報告する研究（青木, 2001; 高他, 2015）もある。

年齢差については、高齢者のほうが、孤独感が強いと思われがちであるが、必ずしもそうではない。多くの研究から若年層と壮年層のほうがより孤独感を感じていることが一貫して得られている。イギリスの国家統計局（Office for National Statistics, 2018）によれば、16-24 歳の若年層のほうがより孤独感を感じている。Victor & Yang（2012）は、イギリス人のデータを分析したところ、25 歳以下と 65 歳以上の人がより高い孤独感をもっていると報告している。Nguyen et al.（2020）は、20-69 歳のアメリカ在住の対象者を調べたところ、孤独感のレベルは 20 代が最も高く、60 代が最も低く、40 代半ばにもう一つのピークがあると報告している。15-79 歳までの日本人を対象とした調査では、40、50 代のほうがより孤独感を感じていると報告している（Murayama & Tabuchi, 2021）。また、コロナ禍に実施された日本人を対象とした全国調査においても、若年層の高い孤独感が報告されている（内閣官房, 2022）。

次に、一人暮らしと孤独感の関連についてまとめる。孤独感に関する初期の研究では、一人暮らしと孤独の概念は、しばしば同じ意味で使われていた。孤独感と一人暮らしの関係を示す研究においては、一貫した結果が得られていない。一人暮らしと孤独感の間には関連がないこと（Zebhauser et al., 2014）、一人暮らしのほうが孤独感が強い（Beutel et al., 2017）、一人暮らしが孤独感の強い危険因子である（Sundström et al., 2009）と報告されてきたが、これらの研究が主に高齢者を対象としたものである。一人暮らしであっても、必要な場合にソーシャルサポートを受けられるのであれば強い孤独感に陥ることがないかもしれない。また、一人暮らしで社会的なつながりがほとんどなくても、自分の趣味や活動で質の高い目的のある生活を楽しむ人もいると思われる。このように、一人暮らしは孤独感のリスクを高めるかもしれないが、一人暮らしだからといって必ずしも孤独感が強いとは限らないことが推測される。

また、孤独感に影響を与える社会的要因については、ネットワークサイズが小さいこと（Hawkley et al., 2008）、社会的サポートの欠如、友人との接触頻度の少なさ（Luhmann

& Hawkley, 2016）などが、孤独感に関連していることが報告されている。また、若年層において、友人との接触頻度と孤独感の間には強い関連があること、家族との接触頻度と孤独感の間の関連は中年層においてのみ見られたことが報告されている（Franssen et al., 2020）。一方、高齢者を対象とした研究においては、多くのことが明らかにされている。65 歳以上の日本人を対象とした調査では、対人ネットワークの量でなく質が孤独感の軽減に貢献すること、看病や世話をしてくれる人がいることや近所付き合いが多いことが孤独感の軽減に貢献することが報告されている（舛田・田高・臺, 2012）。また、在宅で高齢者を介護する 65 歳以上の日本人を対象とした研究では、自治会・趣味などの地域活動への参加や、相談できる専門職がいる層のほうが、孤独感が弱いことが報告されている（永井・東・宗正, 2016）。住宅団地に居住する 65 歳以上の独居高齢者を対象とした研究では、別居子家族と会う頻度が少ない層や友人と会う頻度が少ない層で孤独感が強いことが報告されている（安藤・小池・高橋, 2018）。

さらに、特定のライフイベント（トリガーと呼ばれる）は、孤独のリスクを高めると報告されている。例えば、引っ越しや移住、死別、結婚や離婚、出産、または子どもの自立などが孤独感の引き金になることがある（British Red Cross and Co-Op, 2016）。

最後に、孤独感に関連する個人的要因については、パーソナリティ特性や対人信頼感、自尊心などの影響が検討されている。孤独感と Big Five 性格特性の関係に関する先行研究をメタ分析した研究（Buecker, 2020）では、神経症傾向と孤独感の間には正の相関、誠実性、協調性、外向性および開放性のそれぞれが孤独感との間には負の相関がみられたと報告されている。また、自尊心が高いほど、孤独感が弱いこと（Dixon & kurpius, 2008）、対人信頼感が高いほど孤独感が弱いこと（馬, 2005）が報告されている。

孤独感の文化比較

孤独感は文化の影響を受けるのか。孤独感に関する文化比較研究の多くは、集団主義的文化と個人主義的文化の 2 次元で検討されたものである。ところが、一貫した結果が得られていない。集団主義的文化のほうが孤独感の強いと報告している研究もあれば（Heu, van Zomeren & Hansen, 2019）、真逆の結果を見出している研究もある（Barreto et al., 2021）。以下には、孤独と関連する文化の要因について概観する。

まず、個人主義的文化よりも集団主義的文化のほうが孤独感のレベルが高いという結果については、対人関係および帰属理論を用いて議論されてきた。集団主義的文化では、対人関係が重視されており、強い対人関係が社会規範となっているため、深い繋がりの欠如は、苦痛として経験されやすく、孤独感を増大させると考えられている（Lykes & Kemmelmeier, 2014）。また、Anderson（1999）は、帰属理論を用いて、なぜ中国人がアメリカ人よりも強い孤独感を感じていることを説明している。具体的には、欧米人を対象とした研究では、失敗を内的要因（能力や性格）に帰属することが抑うつや孤独感と関連していることが見出された（例えば、Anderson et al., 1988; Anderson et al., 1994）。また、中国人はアメリカ人よりも、失敗を内的要因に帰属することが多いことが報告されている（Anderson,1999）。このように、西洋文化では、失敗を能力や性格に帰属することは、うつ病や孤独感の増加につながる可能性が高い不適応パターンと見なされている。この西洋文化の基準に従うと、中

国においてもそのような帰属が不適応であれば、アメリカと中国の間で孤独感の文化差は、帰属理論を用いて解釈できると考えられている。

一方、集団主義的文化よりも個人主義的文化のほうが孤独感レベルが高いという結果については、「関係流動性」を用いて解釈されている。集団主義的文化では、個人が既存のソーシャル・ネットワークに依存する傾向があり、「関係流動性」が低いのに対して、個人主義的文化では、個人は友人関係を形成することや解消することを継続的に選択でき、「関係の流動性」がはるかに高い傾向がある（Schug, Yuki, & Maddux, 2010）。集団主義的文化では、家庭やコミュニティの構造が安定していることは、低い孤独感につながる。一方、個人主義的社会では、人間関係が流動的であり、相手との関係を継続的に選択・維持することは、高い孤独感につながる恐れがある。また、一旦人間関係を選択する自由が制限されていると、孤独感が増大すると予想される（Lykes & Kemmelmeier, 2014）。

また、孤独感の予測因子は、文化によって異なると報告されている（Lykes & Kemmelmeier., 2014）。具体的には、集団主義的文化では、家族との交流が少ないことのほうが、孤独感と密接に関連しているのに対して、個人主義的文化では、友人との交流がないことや相談相手がいることのほうが孤独感と密接に関連している。

これまでの孤独感の文化比較研究は、主に欧米が代表する個人主義的文化と東アジアが代表する集団主義的文化との比較である。同じ東アジア文化圏内の比較について、Xie et al.（2021）では、日本人大学生 111 名と中国人大学生 83 名を対象に質問紙調査を行ったところ、中国人大学生は日本人大学生よりも、強い孤独感を感じていることがわかった。

異なる社会や文化の中で孤独感を感じやすい層はどのような特徴があるのか。これまでの孤独感に関する研究では、文化の影響に関する検討がまだ不十分であり、同じ東アジア文化圏といった枠内における国々の間の違いが見過ごされている。また、孤独感の関連要因に関しては一貫した結果が得られていないことから、異なる文化背景において、それぞれの要因の相対的な影響力が異なる可能性が考えられる。孤独感に与える文化の影響を考慮した上で、孤独感の関連要因を検討することは、孤独感の生起メカニズムの理論に知見を与えることができる。

本研究では、孤独感の関連要因について、上述した先行研究をもとに、人口統計学的要因、社会的要因、個人の特性的要因の 3 つの側面から日中比較を行うことで、日本と中国における孤独感の相違点を調べ、孤独感を生む文化に特有の社会文化的要因を検討する。

方法

本研究の分析には、国際比較調査グループ ISSP（International Social Survey Programme）が、2017 年に実施した調査「社会的ネットワークと社会的資源」の日本（1,609 人）と中国のデータ（4,219 人）を用いる。ISSP2017 では、日本と中国はいずれも 18 歳以上の男女を対象とした[2)]。日本では、住民基本台帳から層化 2 段無作為抽出を用い、2017 年 10～12 月に、配布回収法で調査を実施された。中国では、層化 4 段無作為抽出法を用い、2017 年 6～12 月に面接法を用いて調査を実施された。データの使用に当たり、ISSP のウェブサイト[3)]より二次データの提供を受けた。

表 1　調査の概要

	日本	中国
実施時期	2017年10～12月	2017年6～12月
調査方法	配布回収法	面接法
調査対象	18歳以上の男女	18歳以上の男女
抽出方法	層化2段無作為抽出	層化4段無作為抽出
計画標本	2,400	6,000
有効回答数	1,609	4,219

本研究で大規模社会調査のデータを用いる理由および ISSP2017 のデータを用いる理由を簡単に述べる。上述したように、孤独感は、年齢層や地域、婚姻状況といった人口統計学的要因の影響を受けていることが報告されてきた。これらの要因をすべて考慮した上で、孤独感を検討するには、まず幅広い地域や年齢層のサンプルを集める必要がある。近年、ウェブ調査やクラウドソーシングサービスなどが盛んになり、比較的少ない費用で幅広いサンプルを集めることが可能となる。しかし、いずれの調査会社を経由しても、同調査会社のモニターに登録されている人のみが対象となり、デジタルに強い比較的若い層や都市居住層しかプールできない可能性が高く、偏ったサンプルしか取れない恐れがある。大規模社会調査のデータを用いるメリットとしては、層化無作為抽出法を用いて、母集団の特性をできるだけ保つように配慮して標本をランダムに抽出されていることが挙げられる。

また、ISSP2017 を用いる理由については、ISSP2017 のテーマは、「社会的ネットワークと社会的資源」であり、孤独感を含み、他者との接触や友人づきあいなどの人間関係のネットワークに関する設問、生活満足度などの個人的要因に関する設問も多く含まれているため、3 つの側面から孤独感の関連要因を検討することが可能である。本研究で用いる変数の情報を表 2、各変数の記述統計量を表 3 に示す。

まず、従属変数である孤独感は、「話し相手がいないと感じた」「まわりが孤立していると感じた」「周りから取り残されていると感じた」の 3 項目で測定されている。この 3 項目は、多くの研究で広く使用されている UCLA 孤独感尺度（Russell et al., 1978）の短縮版である。次に、独立変数の操作について説明する。本研究では、人口統計学的要因として、性別、年齢、学歴、婚姻状況、同居者の有無、勤務形態、都市規模、家計状況および主観的階層帰属意識を用いる。社会的要因として、「平日に接する人の人数」、「平日に直接会う人の人数」、「知人や友人との 3 人以上の外食頻度」、「両親との連絡頻度」、「親しい友人との連絡頻度」、「家族からのプレッシャー」、「家族・友人からの要求」、「重要な人に怒られる経験」を用いる。

個人的要因について、先行研究では、パーソナリティ特性や対人信頼感、自尊心などが検討されてきたが、ISSP2017 においては、パーソナリティ特性や自尊心に関する設問がない。Tafarodi & Swann（2001）は、自尊心が自己好意（self-liking）と自己有能感（self-competence）の二側面からなると主張し、前者は内面化された社会的価値観に基づく感情判断を指し、後者は努力とそれに対応する成功経験に伴う有能感、効力感を指す。この考え方によると、自己効力感は自尊心の一側面として捉えることができる。そこで、本研究では、自尊心の代わ

りに、自尊心に関連する「挫折感」と「自己効力感」を用いる。また、一般的信頼と対人信頼感（近隣住民に対する信頼など）の間には強い関連があり、対人信頼感が一般的他者への信頼を高める効果があると報告されており（片岡, 2014)、本研究では、対人信頼感の代わりに、一般的信頼感を用いる。また、人との付き合いに関する信念に関わる友人観の 2 項目を用いる（その人が自分の役に立つという理由だけで、親しくなってもかまわない；自分のために便宜をはかってくれた人には、恩を感じなければならない)。さらに、従来の研究では、孤独感が生活満足度に与える影響が多く検討されてきたが、本研究では、生活満足度を個人的要因として、説明変数としてモデルにいれる。

表 2　使用変数の情報

変数		変数の情報
従属変数	孤独感	話し相手がいないと感じた（5件法）
		まわりから孤立していると感じた（5件法）
		周りから取り残されていると感じた（5件法）
人口統計学の要因	性別	男性、女性
	年齢	18-34歳、35-49歳、50-64歳、65歳以上と4カテゴリーに区分した
	学歴	高等学校卒業以下（高校卒、中学校卒、小学校卒を含む）、大学卒以上（短大および大学院修了を含む）の2カテゴリーに区分した
	婚姻状況	未婚、結婚
	同居者の有無	一人暮らし、同居者あり
	勤務形態	有職、無職
	都市規模	大都市中心部、大都市の郊外、中小都市、町村部（農漁村を含む）の4カテゴリー
	家計状況	あなたのご家庭の収入で、家計をやりくりするのは大変ですか、それとも楽ですか（5件法）
	主観的階層帰属意識	「かりに現在の日本の社会全体を、次のような 10までの層に分けたとすれば、あなたはどのあたりにいると思いますか。」（「一番上：10点」～「一番下」：1点）
社会的要因	平日接する人の人数	あなたはふだんの平日、1日に何人ぐらいの人と接していますか（6件法）
	平日直接会う人の人数	あなたが直接会っている人はどのくらいですか。（5件法）
	知人や友人との3人以上の外食頻度	あなたは、家族・親戚以外の知り合いや友人と、3人以上で食事や飲みに出かけることがどのくらいありますか（8件法）
	両親との連絡頻度	自分の親と、直接会ったり電話やインターネット、その他の通信手段を使ったりして、どのくらい接していますか。（8件法）
	親しい友人との連絡頻度	あなたは、親しい友人と、直接会ったり電話やインターネット、その他の通信手段を使ったりして、どのくらい接していますか。（8件法）
	家族からのプレッシャー	あなたの家族や親戚は、あなたの生き方や暮らし方について、あなたにプレッシャーをかけることがありますか。（5件法）
	家族・友人からの要求	あなたは、家族や親戚、友人が、自分に多くのことを要求しすぎると感じることがありますか。（5件法）
	重要な人に怒られる	配偶者やパートナー、家族や親戚、親しい友人など、あなたにとって重要な人が、この1か月の間になたに対して腹を立てることがありましたか。（5件法）
個人的要因	生活満足度	あなたは今の生活に、全体としてどのくらい満足していますか。（7件法）
	挫折感	あまりにも多くの問題を抱えて、克服できないように感じた。（5件法）
	自己効力感	私にとって自分の目標を達成するのは、簡単なことである。（7件法）
	友人観	・その人が自分の役に立つという理由だけで、親しくなってもかまわない 。（4件） ・自分のために便宜をはかってくれた人には、恩を感じなければならない。（4件法）
	一般的信頼感	他人と接するときには、相手の人を信頼してよいと思いますか。それとも、用心したほうがよいと思いますか。（4件法）

表 3　変数の記述統計

質的変数		日本(n=1609)		中国(n=4219)	
		度数	%	度数	%
性別	男性	744	46.47	2031	48.3
	女性	857	53.53	2176	51.7
年齢	18－34	289	18.1	854	20.3
	35－49	364	22.7	1086	25.8
	50－64	424	26.5	1273	30.3
	65－89	524	32.7	994	23.6
学歴	高卒以下	896	57.1	3381	80.5
	短大・大卒	672	42.9	817	19.5
婚姻状況	未婚	535	33.8	964	23.3
	既婚	1050	66.2	3165	76.7
同居者	なし	138	8.8	802	19.1
	あり	1432	91.2	3405	80.9
勤務形態	無職	522	33.4	1850	44.0
	有職	1043	66.6	2357	56.0
都市規模	大都市	177	11.2	1650	39.2
	大都市郊外	309	19.5	816	19.4
	中小都市	595	37.6	281	6.7
	町村部・漁村	500	31.6	1460	34.7
	量的変数	平均値	SD	平均値	SD
	主観的階層帰属意識	4.8	1.6	4.1	1.7
	平日接する人の人数	2.5	1.2	2.1	1.2
	平日直接会う人の人数	3.5	1.1	3.5	1.4
	知人や友人との3人以上の外食頻度	3.3	1.4	3.5	1.9
	両親との連絡頻度	4.0	2.1	4.5	2.0
	親しい友人との連絡頻度	5.0	2.0	5.5	2.0
	家族からのプレッシャー	1.9	1.0	1.6	0.8
	家族・友人からの要求	1.8	0.9	1.5	0.8
	重要な人に怒られる	1.8	0.9	1.7	0.8
	生活満足度	4.7	1.4	4.9	1.1
	挫折感	2.0	1.0	2.0	0.9
	自己効力感	3.5	1.2	4.4	1.4
	友人観：友人の利用価値	2.6	1.2	2.7	1.0
	友人観：互恵性	3.9	0.9	4.2	0.7
	一般的信頼感	2.2	0.7	2.5	0.8

結果

本研究では、χ^2検定に関しては、「js-STAR XR+(release 1.5.2j)」を、因子分析と階層的重回帰分析は「IBM SPSS Statistic(Version27)」を用いた。3 項目からなる孤独感尺度について、探索的因子分析を行ったところ、日中とも 1 因子が得られ、いずれの項目も因子負荷量は.70 以上で、信頼性を示すクロンバックの α係数はいずれも 0.85 以上と十分な値が得られた。なお、日中とも寄与率は 70%以上となり、十分な値であった（表 4)。

表 4　孤独感尺度の因子構造

項目	日本	中国
	Factor1	Factor1
周りから孤立していると感じた	.96	.93
周りから取り残されていると感じた	.89	.90
話し相手がいないと感じた	.78	.71
因子寄与	2.33	2.18
因子寄与率	77.64%	72.71%
α係数	.91	.87

3 つの項目を用いて測定されている孤独感について、まず日本人と中国人の全体の傾向をみてみる。日中ともいずれの項目についても、「まったくなかった」と「ほとんど」の合計の割合は約 8 割であり、孤独感を感じている人の割合は 2 割程度である（図 1）。また、「周りから孤立していると感じた」と「周りから取り残されていると感じた」においては、日本と中国の間には、それぞれの選択肢の割合には違いがみられなかった。一方、「話し相手がいないと感じた」については、「まったくなかった」と回答した日本人の割合は 57.1%と 5 割強であるのに対して、中国人ではその割合は 41.9%と 5 割を下回っている。χ^2 検定を行ったところ、日本人よりも、中国人のほうが、「話し相手がいないと感じた」の割合が有意に高かったことがわかった（χ^2（4）= 140.737, p<.01）。それぞれの項目について、性差があるかどうかを調べたところ、日中とも、有意な性差がみられなかった。

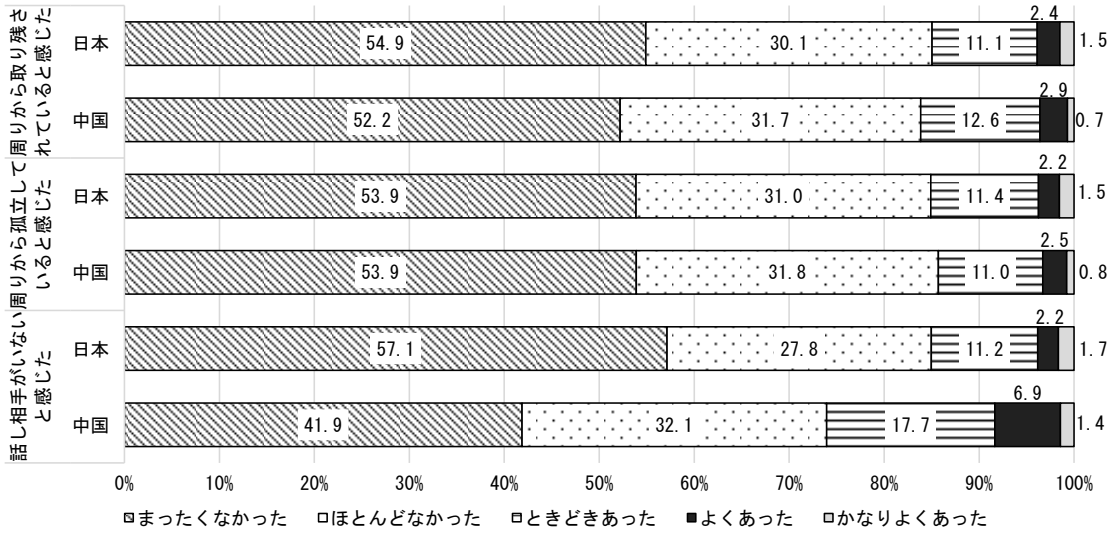

図 1　孤独感の日中比較

孤独感の関連要因を検討するため、男女別に、孤独感（3 項目の得点の合計値）を目的変数、人口統計学的要因、社会的要因、個人的要因を説明変数とする階層的重回帰分析を行った。また、本研究では、カテゴリー変数はダミー変数に変換し、連続変数はそのまま利用している。例えば、婚姻状況という変数については、「未婚」を「0」、「既婚」を「1」とするダミー変数を作成し、「結婚ダミー」という変数としてモデルに入れる。他のカテゴリー変数についても同様な手順で作成した。ダミー変数を用いる際に、どこか 1 つのカテゴリーを基準変数（参照カテゴリー：ref.と表記する）として、モデルにいれないようにする。例えば、婚姻状況の変数について、「未婚ダミー」を参照カテゴリーとして、「結婚ダミー（既婚）」のみをモデルに投入する。

分析にあたって、すべてのモデルには統制変数として、性別、年齢、学歴、婚姻状況などの属性を強制投入した。モデル 1 では統制変数のみを投入し、モデル 2 では社会的要因に関する変数、モデル 3 で個人的要因に関する変数を強制投入した。モデルは、標準偏回帰係数を算出している。

モデルの多重共線性をチェックするために、VIF（Variance Inflation Factor）の値を確認したところ、男性と女性のいずれのモデルにおいても、すべての変数の VIF は 5 以下で、

ほとんどの値は 2 以下となっており、10 以下という許容の範囲内であることから、全変数を説明変数に投入することが可能であると判断した。

まず、日本人の結果をみてみる。F検定を行ったところ、男女とも、モデル 1 からモデル 2（男性：$\triangle R^2$=.16, p < .01; 女性：$\triangle R^2$=.20, p < .01）、またモデル 2 からモデル 3 への決定係数の変化量（男性：$\triangle R^2$=.15, p < .01; 女性：$\triangle R^2$=.07, p < .01）が有意であり、変化率でみた場合、モデル 2 でもっとも大きな変化率を示した。これらの結果により、日本人の孤独感の説明モデルとして、モデル 3 のほうが、妥当性が高く、日本人の孤独感は人口統計学的要因、社会的要因、個人的要因などの各要因によって説明されるものといえる（表 5）。ここでは、モデル 3 の結果について説明する。

表 5　日本人の孤独感を従属変数とした階層的重回帰分析の結果

変数名	男性			女性		
	モデル1	モデル2	モデル3	モデル1	モデル2	モデル3
年齢（ref.=65歳以上）						
18-34歳ダミー	0.056	0.188	.218	0.220 +	0.231 +	.252 *
35-49歳ダミー	0.182	0.275 +	.305 *	0.204	0.160	.173
50-64歳ダミー	0.175	0.260 +	.290 *	0.163	0.144	.137
大卒ダミー（ref.=高校以下）	0.009	0.020	.064	0.094	0.103	.090
有職ダミー（ref.=無職）	-0.083	-0.073	-.118	-0.167 *	-0.065	-.099
結婚ダミー（ref.=未婚）	-0.143	-0.051	.009	-0.083	-0.169 *	-.151 +
1人暮らしダミー（ref.=同居者あり）	0.007	0.074	.028	-0.045	-0.031	-.064
家計状況	-0.050	-0.039	.116	-0.074	-0.055	.021
主観的階層帰属	0.067	0.106	.048	-0.026	0.031	.027
都市規模（ref.=町村）						
大都市ダミー	-0.040	-0.050	-.043	-0.014	0.004	.020
大都市の郊外ダミー	-0.074	-0.032	-.050	-0.127	-0.119	-.112
地方の中小都市ダミー	-0.113	-0.061	-.051	-0.013	0.012	.013
社会的要因						
知人や友人との3人以上の外食頻度		-0.164 +	-.141		0.045	.049
両親との連絡頻度		-0.032	.023		-0.147 *	-.154 *
親しい友人との連絡頻度		0.070	.109		-0.221 **	-.193 *
平日接する人の人数		-0.236 **	-.247 **		-0.213 **	-.212 **
直接会う人		-0.226 **	-.123		-0.054	-.003
家族などからのプレッシャー		-0.022	-.060		0.285 **	.174 *
家族などからの要求		0.193 +	.057		0.043	.055
重要な人に怒られる		0.057	.047		0.010	-.078
個人的要因						
生活満足度			-.286 **			-.070
自己効力感			-.153			-.110 +
挫折感			.198 *			.222 **
一般的信頼感			-.028			.022
友人観：友人の利用価値			.156 +			.001
友人観：恩恵			.011			-.104
R^2	.044	.201 +	.346 **	.069	.268 **	.333 **
$\triangle R^2$	.044	.157 **	.145 **	.069	.198 **	.065 **

** p < .01, * p < .05, + p < .10

日本人男性については、以下のことがわかった。「35-49 歳」（β=.305, p<.05）、「50-64 歳」（β=.290, p<.05）が有意な正の値を示しており、65 歳以上の高齢層よりも中高年層のほうが強い孤独感を感じている傾向がみられた。また、「平日接する人の人数」（β=－.247,

p<.01）は有意な負の値を示しており、平日により多くの人と接するほど、孤独感が弱い。さらに、「生活満足度」（β=－.286, p<.01）は有意な負の値を示しており、生活満足度が高いほど、孤独感が弱い。最後に、「挫折感」（β=.198, p<.01）は有意な正の値を示しており、挫折感を強く感じるほど、孤独感が強い。

一方、日本人女性については、以下のことがわかった。「18-34 歳」（β=.252, p<.05）が有意な正の値を示しており、高齢層よりも若年層のほうが強く孤独感を感じている傾向がみられた。また、「平日接する人の人数」（β=－.154, p<.05）に加え、「親しい友人との連絡頻度」（β=－.212, p<.05)、「両親との連絡頻度」（β=－.193, p<.05）におもいても有意な負の値を示しており、普段、家族や友人と連絡する頻度が高いほど、孤独感が弱い。さらに、「家族からのプレッシャー」（β=.174, p<.01）が有意な正の値を示しており、普段、家族からのプレッシャーを強く感じているほど、孤独感が強い。最後に、日本人男性と同じく、挫折感（β=.222, p<.01）を感じるほど、孤独感が強い傾向がみられた。

次に、中国人の結果をみてみる。まず、モデルの多重共線性をチェックするために、VIF（Variance Inflation Factor）の値を確認したところ、男女のいずれのモデルにおいても、ほとんどの VIF は 2 以下となっており、すべての変数の VIF は 10 以下という許容の範囲内であることから、全変数を説明変数に投入することが可能であると判断した。日本人の結果と同様に、男性と女性のいずれとも、モデル 1 からモデル 2（男性：$\triangle R^2$=.13, p < .01; 女性：$\triangle R^2$=.10, p < .01)、またモデル 2 からモデル 3 への決定係数の変化量（男性：$\triangle R^2$=.11, p < .01; 女性：$\triangle R^2$=.10, p < .01）が有意であり、変化率でみた場合、モデル 2 でもっとも大きな変化率を示した。これらの結果により、中国人の孤独感の説明モデルとして、モデル 3 のほうが、妥当性が高く、中国人の孤独感は人口統計学的要因、社会的要因、個人的要因などの各要因によって説明されるものといえる（表 6)。以下には、モデル 3 の結果について説明する。

中国人男性については、以下のことがわかった。「結婚ダミー」（β=－.090, p<.05）が有意な負の値、「一人暮らしダミー」（β=.088, p<.05）が有意な正の値を示しており、未婚者層、独居者層のほうが、孤独感が強い。一方、家計状況については、モデル 1 とモデル 2 では有意な負の値を示しているが、モデル 3 では、有意でなくなった。ここでは、家計の厳しさが孤独感に直接に関連しているのではなく、家計の厳しさが他の社会的要因を経由して孤独感と関連しているのかもしれない。また、「家族友人からの要求」（β=.078, p<.05）と「重要な人に怒られた」（β=.169, p<.01）は有意な正の値を示しており、家族や親戚などが、自分に多くのことを要求しすぎると感じる層、重要な人に怒られた経験がある層のほうが、孤独感が強い。さらに、「挫折感」（β=.327, p<.01）は有意な正の値を示しており、挫折感を感じるほど、孤独感が強い。

一方、中国人女性について、男性と同じく、「一人暮らしダミー」（β=.111, p<.01）が有意な正の値を示しており、独居者層のほうが、孤独感が強い。また、「家族からのプレッシャー」（β=.139, p<.05）と「重要な人に怒られた」（β=.124, p<.01）は有意な正の値を示しており、普段、家族からのプレッシャーを強く感じている層、重要な人に怒られた経験がある層のほうが、より強く孤独感を感じている。挫折感（β=.331, p<.01）を感じるほど、孤独感が強いという点においても、男性と同じ傾向である。

表 6　中国人の孤独感を従属変数とした階層的重回帰分析の結果

変数名	男性			女性		
	モデル1	モデル2	モデル3	モデル1	モデル2	モデル3
年齢（ref.=65歳以上）						
18-34歳ダミー	0.057	0.013	-.039	0.129	0.045	.065
35-49歳ダミー	0.060	0.057	.011	0.107	0.051	.037
50-64歳ダミー	0.034	0.057	.028	0.052	0.010	-.002
大卒ダミー（ref.=高校以下）	-0.024	-0.035	-.022	-0.031	-0.029	-.043
有職ダミー（ref.=無職）	-0.011	0.006	.007	-0.033	-0.038	-.047
結婚ダミー（ref.=未婚）	-0.105 *	-0.090 *	-.090 *	0.004	0.003	.025
1人暮らしダミー（ref.=同居者あり）	0.114 **	0.114 **	.088 *	0.121 **	0.132 **	.111 **
家計状況	-0.177 **	-0.127 **	-.041	-0.186 **	-0.145 **	-.052
主観的階層帰属	-0.051	-0.030	.007	-0.033	-0.014	.012
都市規模（ref.=町村）						
大都市ダミー	-0.042	-0.050	-.051	0.007	0.011	.044
大都市の郊外ダミー	-0.005	-0.011	-.013	0.039	0.031	.047
地方の中小都市ダミー	-0.018	-0.020	-.030	0.052	0.031	.023
社会的要因						
知人や友人との3人以上の外食頻度		0.046	.053		-0.038	-.036
両親との連絡頻度		-0.044	-.020		0.006	.017
親しい友人との連絡頻度		-0.013	.010		-0.064 +	-.060 +
平日接する人の人数		-0.046	-.030		0.003	.006
直接会う人		-0.051	-.034		-0.051	-.040
家族からのプレッシャー		0.043	.008		0.161 **	.139 **
家族友人からの要求		0.131 **	.078 *		-0.004	-.017
重要な人に怒られる		0.240 **	.169 **		0.208 **	.124 **
個人的要因						
生活満足度			-.068 +			-.027
自己効力感			-.044			-.011
挫折感			.327 **			.331 **
一般的信頼感			-.044			-.008
友人観：友人の利用価値			.034			-.022
友人観：恩恵			-.032			-.050 +
R^2	.080 **	.205 **	.317 **	.068 **	.170 **	.265 **
ΔR^2	.080	.125 **	.112 **	.068	.102 **	.095 **

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

考察

本研究では、ISSP2012 のデータを用いて、日本人と中国人の孤独感の関連要因について比較検討した。日本と中国の結果を以下のようにまとめる。

人口統計学的要因について、年齢の効果においては、日本では、中高年層の男性、若年層の女性がより強く孤独感を感じていることが示唆されたが、中国では、男女とも年齢の効果がみられなかった。結婚の効果においては、中国人男性においてのみ有意な負の効果がみられた。さらに、同居者の有無においては、中国では、男女とも一人暮らしのほうがより強く孤独感を感じていることが示唆されたが、日本では、同様の傾向がみられなかった。

社会的要因について、日本では、男女とも、平日接する人の人数が多いほど孤独感が弱いこと、女性では両親と親しい友人との連絡頻度が高いほど、孤独感が弱いことが示唆された。一方、中国では、周りの人との連絡・会合の頻度や接する人の人数の効果がみられなかった。また、家族との関わりについては、日本人女性と中国人女性では、家族からのプレッシャー

の正の効果がみられたが、日本人男性と中国人男性においては、同様の傾向がみられなかった。一方、家族などからの要求については、中国人男性においてのみ正の効果がみられた。さらに、中国では、男女とも重要な人に怒られた経験が正の効果がみられたが、日本では男女とも有意ではなかった。

個人的要因について、日中とも挫折感を感じるほど、孤独感が強いことが示唆された。以下には、日本と中国の相違点に着目しながら、考察する。

日本人のほうが、より「話し相手がいない」と感じる？

孤独感を測定する 3 項目のうち、「話し相手がいないと感じた」という項目のみ日中で差がみられた。また、日中とも、この項目の因子負荷量は.80 以下で、他の 2 項目よりやや低くなっている。この結果を考察する前に、日本語と中国語のそれぞれの調査票における該当項目の表現を比較して、意味合いやニュアンスが同じかどうかを確認した。「話し相手がいないと感じた」は、英語では “You lack companionship”になっており、日本語では、「話し相手がいない」、中国語では、「感觉缺少陪伴（付き合いが少ないと感じた）」となっている。ここでの「話し相手がいない」と「付き合いが少ない」は少しニュアンスが異なるように考えられる。他の研究者が翻訳した UCLA の孤独感の短縮版を参照したところ、「自分には人との付き合いがないと感じることがありますか」（Arimoto & Takada, 2019）、「あなたは、自分に仲間付き合いがないと感じることがありますか」（Igarashi, 2019）となっている。一方、他の 2 項目のそれぞれの翻訳については、ほぼ同じ意味として捉えられることを確認した。

上記を踏まえて、該当項目について、中国語調査票の翻訳は、本来の項目の意味により近いと考えられる。「話し相手がいない」という設問に対して、家で家族との会話などがあれば、話し相手がいないわけではなく、「あてはまらない」と回答するのかもしれない。一方、「付き合いまたは仲間付き合いが少ない」という設問にすれば、どちらかというと家族以外の人との付き合いをイメージされやすいと推察される。

このように、日本の調査では「話し相手」という表現には「家族との会話など」も含まれる可能性が高く、あてはまると回答する人の割合がより低いのかもしれない。項目の意味自体は日本語と中国語で少し異なるので、日本調査において「付き合いが少ない」という表現を使う場合は、本研究でみられた文化差が顕著でなくなるのかを調べることで、果たして本研究で得られた文化差は、調査項目の訳語の違いによるものなのかを今後検証する必要があると考えられる。

孤独感が高い日本人中高年層男性と日本人若年層女性

まず、日本において、男性では中高年層（35-64 歳）、女性では若年層（18-34 歳）のほうがより孤独感を感じていることについて考察する。「日本人のおじさんが世界一孤独」と言われて久しく、しばしばメディアに報道されている。その理由として、日本人中高年男性の友人関係の希薄さが取り上げられている。また、その日本人中高年男性の友人関係については、「東洋経済 ONLINE」のコラムとして掲載された「日本のオジサンが『世界一孤独』な根本原因」（岡本, 2017）という記事においては、日本人のオジサンのコミュニケーション

力の乏しさを用いて次のように説明されている。

> 「男性は人と繋がる時、何かの媒介、物、経験などが必要である場合が多い。一緒にスポーツをする、ゲームをするなど、何かの物理的なきっかけを要するのだ。女性は、そうした媒介がなくとも、関係性を成り立たせることができる。何時間でも電話をしながら、お茶を飲みながら、延々と会話を成り立たせることができる。恋バナ、夫の悪口や子供への不満、語るネタは売るほどある。一方で、男性同士が面と向かって、うわさ話に興じる姿はあまり思い浮かばない。その間には将棋があったり、スポーツがあったり、もしくは仕事の話だったり」（岡本, 2017, 2）

また、岡本（2018）が著した『世界一孤独な日本のオジサン』では、コミュニケーション力の他、日本の中高年男性の高い孤独感の背景として、社会的要因として日本企業のシステムがあり、年功序列制度という「縦割り社会」のなか、フラットなコミュニケーションができづらい環境が挙げられている。また、文化的要因として、中高年男性は「孤独をよし」とする価値観に縛られ、孤独は「自己責任」だと考えているのも一因であると指摘されている。

中高年男性の孤独感の程度を示す割合ではないが、ここで、日本における中高年男性の高い自殺率を取り上げる。厚生労働省統計情報部の「人口動態統計（確定値）」を基に、自殺対策推進室が集計した自殺死亡数及び自殺死亡率 [4]によると、2017 年時点の人口 10 万人あたりの男性の自殺死亡率を年代別にみると、50-54 歳（32.5%）、55-59 歳（32.2%）、45-49 歳（29.2%）が他の年齢層と比べて高く、50 代をピークに山形となっており、もう 1 つのピークは 85 歳以上の層である。その背景には、壮年期（40 歳～64 歳）になると、事業の失敗、仕事上のミス、過労、転職、失職、定年など仕事上の問題が自殺の直接動機になりやすい（大原, 1987）、メンタルヘルス問題、失業・無業問題、生涯未婚・熟年離婚問題という健康格差、結婚格差がもたらす中高年男性の社会的孤立の現状がある（土堤内, 2014）などの要因が挙げられている。前述の自殺の原因となる様々な要因は、中高年男性の孤独感の引き金にもなりうると推測される。また、厚生労働省（2016）の「平成 28 年度自殺対策に関する意識調査」によると、「悩みを抱えたときやストレスを感じたときに、誰かに相談したり、助けを求めたりすることにためらいを感じるか」という設問について、性・年齢別に見ると、「そう思う」と回答している割合は、女性よりも男性の方が高く、また男性においては、50 代（57.3%）と 60 代（57.7%）が最も高くなっている。困難やストレスなどなんでも一人で抱え込むことで、中高年男性は自分を孤独状態に追い詰めているのかもしれない。

ところが、日本人を対象とした社会調査は、日本人の中高年男性の孤独感が最も強いことを示したものがほとんどない。その理由の一つとして、これまでの日本における孤独感の実証的研究は、主に独居高齢者に着目しているものが多く、その以外の年齢層に関する検討自体が少ないことが挙げられる。また、コロナ禍以降で増加した孤独感研究においては、自粛要請で他者とのつながりが急激に減ったことで、若年層の孤独感の増大が目立つ。この点については、今後より多くの実証的研究を重ねて、更なる検討を行う必要がある。

一方、友人づくりの点からみると、岡本（2017）によれば、若年層の女性は比較的に友人

をつくりやすいほうと推測されるが、なぜ日本人女性では、逆に若年層のほうがより孤独感を感じているのだろうか。18 歳から 34 歳の女性は、結婚や出産などの人生のイベントを経験し、ライフコースの転換期に当たるという視点から考えてみる。三菱総合研究所が 2018 年に実施した調査によると、最も孤独感を感じているのは、男女とも 20 代であり、そのうち 26 歳女性では 33.9%と最も高くなっている。また、26 歳の女性が孤独感を感じやすい理由に関する回答を分析したところ、未婚者の場合は周囲の結婚（周囲の結婚について、周りに取り残された気分になる)、既婚者の場合は夫の無理解（初婚・初産の多い年齢であり、夫婦関係・子育ても未熟であり、夫の協力も得にくい)、また職場での居場所喪失感（30 代以上のベテランに比べてはだまだ経験が浅く、中途半端な段階であることに対する焦り)、集団の中での孤独感（周りには人がいるのだが、そのグループとはなじめず、余計に孤独を感じる）といった 4 つの理由が挙げられている（劉, 2019)。

一人暮らしは必ずしも孤独ではない日本と一人暮らしのほうが孤独感が高い中国

中国人の孤独感は一人暮らしに大きく影響されていることが明らかになった。一方、日本では、一人暮らしと孤独感の間には有意な関連がみられなかった。

内閣官房が 2022 年に実施した全国調査では、孤独感の状況とそのような状況に至る前に経験した出来事を尋ねている。孤独感を強く感じている層ではそのような状況に至る前に、16.0%の人は一人暮らしを経験しており、孤独感をほとんど感じていない層でも 22.5%の人が「一人暮らし」を経験している。「一人暮らし」になったからといって、必ずしも孤独感に陥るわけではないのかもしれない。

ところが、一人暮らしと孤独感の関係を語る際には、望んで一人暮らしをするかどうかによって感じ方が違うと推測される。もし一人暮らしを望んでいる場合は、一人暮らしが原因で孤独感が増大することがあまりなく、望んでいないが、結果として一人暮らしになった場合は、一人暮らしが孤独感を引き起こす要因となる可能性があると推測される。もし、日本では望んでいる一人暮らしの割合がより高く、中国では望んでいない一人暮らしの割合がより高いとすれば、本研究で得られた一人暮らしが日本人と中国人の孤独感に与える影響の違いを説明できるかもしれない。本研究で用いたデータから、一人暮らしに至る経緯についての情報がないので、この点について、今後検証する必要がある。

また、一人暮らしの場合はそうでない場合と比べると、帰宅後に一人でいる時間が多いと推測される。もし日本では、一人の時間を充分に楽しめる、一人で過ごすのが苦ではない人の割合が高く、中国では、一人の時間をあまり楽しめないのであれば、本研究で得られた一人暮らしが日本人と中国人の孤独感に与える影響の違いを説明できると考えられる。姜・岡田（2021）は日本人と中国人の大学生を対象にアンケート調査を行い、自律に関してどのような実態または意識をもっているのかを検討したところ、日本人大学生は中国人大学生よりも、一人の時間を楽しんでいることがわかった。近年、日本では、「おひとりさま」「ひとり〇〇」という言葉をよく耳にする。カラオケやラーメンなど、誰かと一緒ではなく一人で楽しむことが肯定的になっていきている昨今、一人でも気楽に体験できることが増えており、一人暮らしを楽しめることが低い孤独感に関連しているのかもしれない。

次に、日本と中国における一人暮らしの実態の違いについて説明する。中国では、大学に

入る際には、大学の寮に住むのが基本で、部屋は 4〜8 人によるルームシェアとなっている。大学の 4 年間は、ずっとルームメートがいることになり、家族を離れることになるが、一人暮らしが始まるわけではない。2020 年の『大学毕业生租住蓝皮书(大学卒業生の賃貸青書)』によれば、大学を卒業して社会人になる際、中国社会では、約 9 割の新卒はシェアハウスを選ぶことが報告されている。その背景には、近年中国国内の家賃の高騰が挙げられる。また、大学 4 年間は大学寮で公共生活を送ってきたので、シェアハウスも大学寮の延長と考え、あまり抵抗感がないと考えられる。その後のライフコースを考えると、結婚して家族と一緒に住むようになるケースが多い。

一方、日本では、学生生活実態調査（全国大学生協連, 2021）によると、自宅・実家暮らし以外の大学生は約 5 割であり、そのうち、約 9 割の大学生はアパートやマンションなどに一人暮らしている。大学を卒業して社会人になっても、一人暮らしを継続していることが多い。結婚後も、単身赴任が日常化している日本社会では、家族と離れて一人暮らしをしなければいけないケースも少ない。

このように、あくまでも大学生から社会人になるというライフコースにおいては、日本人は中国人と比べ、より早い時期から一人暮らしを経験しており、望んでいない一人暮らしにも早く慣れていくのかもしれない。

家族との感情的関与と孤独感の関連が強い中国

最後は、家族との感情的関与と孤独感との関係について考察する。中国では、男女とも配偶者やパートナー、家族や親戚などに怒られた経験は孤独感を増大させること、また、男性では家族や親戚などからの要求、女性では家族や親戚などからのプレッシャーは、孤独感を増大させることが示唆された。このように、中国社会では、重要な他者との関わりが、孤独感に影響を与えていることが明らかになった。

「中国の家族制度のもとでは、個人は人間関係のネットワークにしっかりつながっているので、その中で人々は無条件で互いに依存しあえる。中国人にとって親族という永遠の安全地帯は、心理的に高度な安心感と落ち着きを与えている」と指摘されている（尚, 2007）。また、中国人にとっては、親族集団が取り替えることができない最も重要な意味をもっているのに対して、日本の親族集団はその重要性がかなり小さいことも論じられている（尚, 2007）。さらに、金（2014）は大学生を対象に質問紙調査を行い、日本、韓国、中国の家族機能を比較したところ、「相互依存（家族への相談・援助要請）」、「凝集性（家族との情緒的絆）」と「適応性（家族の役割交代などの柔軟性）」においては、中国人大学生は最も高く、日本人が最も低いことがわかった。ほかにも、中国人大学生が日本人大学生よりも親に対して高い依存性をもっていることが報告された（高・本藤, 2008）。このように、中国人は日本人よりも、家族と強い情緒的絆をもっていることが繰り返し報告されている。家族に怒られたことは、中国人に与えるダメージがより大きいかもしれない。両親との関係がうまくいかずに情緒的サポートが得られないことで、より強い孤独感を感じると推測される。

一方、中国人男性では家族からの要求が孤独感を高めることについて考える。尚（2007）は、「中国人は小さな頃からよく勉強して立派な人になり、両親の面目を施し、家族のために争って名誉を手に入れるように教育されている」と論じている。中国人は、親の期待や要

求に応えなくてはならないというモチベーションを常にもっているのだろう。ところが、家族が自分に多くのことを要求しすぎると感じる場合は、それらの要求に応えることが難しいというプレッシャーにともなって、応えられそうにない自分は、面子を失ったと感じ、自分に自信を持てず、孤独状態に陥りやすいのかもしれない。

結語

本研究は孤独感の関連要因について日中比較を行った。多くの要因は、孤独感に与える効果は日本と中国の間で異なっていることが示唆された。また、孤独感の関連要因の日中文化差を生む社会文化的要因を議論した。日本では中高年男性と若年女性の孤独感が強いこと、中国では一人暮らしは孤独感を高めることや、家族との感情的な関与が孤独感と関わっているという本研究の結果は、日本人と中国人の孤独の予防対策を検討する材料となりうると考えられる。

本研究の限界として、本研究で用いたデータはコロナ禍以前に実施された調査から得られたものであることが挙げられる。コロナ禍で、これまで孤独から無縁であった人や集団も孤独に陥るリスクが高まっていると推測される。今後、ウィズコロナ・ポストコロナにおいて、日本人と中国人の孤独感がどのように変化するのか、人々がどのように孤独感を扱うのか、孤独感に関連する要因の効果がどのように変化するのかを比較検討する必要があると考えられる。

次に、本研究で仮定した孤独感に関連する要因のモデルは、要因間の交互作用を検討していないことも限界として挙げられる。それぞれの要因は独立して加算的に働くのではなく、複数の要因があいまって、孤独感に複雑な影響を及ぼしているのかもしれない。今後、要因間の交互作用についても検討し、より細かく文化の違いを検討する必要があると考えられる。

また、本研究は一時点で測定された横断的調査のデータを用いたため、孤独感と諸要因の因果関係が不明であり、検討できる関連要因も限られている。さらに、孤独感の年齢による違いに関する知見は、個人の年齢に伴う変化を示しているわけではない。今後、本研究の結果を踏まえて、縦断的調査を行う必要があると考えられる。例えば、本研究の知見から、もともと孤立に陥りやすい状況にいる在日中国人留学生に、一人暮らしと家族との関わりの欠如が、強い孤独感をもたらすことが推測される。今後、日本にいる中国人留学生や労働者を対象に縦断的調査を行い、孤独感の変化を捉えたうえで、孤独感を軽減する要因を探る必要があると考えられる。

さらに、本研究は日本と中国を比較したが、今後、他のアジア文化圏の国・地域を加えて比較する必要がある。

（神戸大学大学院国際文化学研究推進インスティテュート　協力研究員）

注

1）本稿は、日中社会学会第 33 回大会で発表したデータを再分析し、論文として再構成したものである。

2) ISSP は 1984 年に発足し、約 40 の国と地域の研究機関、毎年、共通の質問で世論調査を実施している。日本からは、1993 年に NHK 放送文化研究所が加盟し、中国からは 2007 年に中国総合社会調査(Chinese General Social Survey)が加盟している。

3) ISSP: https://issp.org/data-download/by-year

4)厚生労働省「人口動態統計に基づく自殺死亡数及び自殺死亡率」
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/jisatsu/jinkoudoutai-jisatsusyasu.html

引用文献

Anderson, C. A. (1999). Attributional style, depression, and loneliness: A cross-cultural comparison of American and Chinese students. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 25, 482-499.

Anderson, C. A., Jennings, D. L., & Arnoult, L. H. (1988). Validity and utility of the attributional style construct at a moderate level of specificity. *Journal of Personality and Social Psychology,* 55, 979-990.

Anderson, C. A., Miller, R. S., Riger, A. L., Dill, J. C., & Sedikides, C. (1994). Behavioral and characterological attributional styles as predictors of depression and loneliness: Review, refinement, and test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66, 549-558.

安藤孝敏・小池高史・高橋知也(2018). 都市部住宅団地のひとり暮らし高齢者における孤独感 横浜国立大学教育学部紀要 Ⅲ (社会科学) 1, 1-9.

青木邦男(2001). 在宅高齢者の孤独感とそれに関連する要因 社会福祉学, 42(1), 125-136.

Arimoto, A., & Tadaka, E. (2019). Reliability and validity of Japanese versions of the UCLA loneliness scale version 3 for use among mothers with infants and toddlers: A cross-sectional study. *BMC Women's Health*, 19, 1-9.

Barreto M, Victor C, Hammond C, Eccles A, Richins MT, Qualter P., (2021). "Loneliness around the world: Age, gender, and cultural differences in loneliness", *Personality and Individual Differences*, 169:110066.

Beutel, M.E., Klein, E.M., Brähler, E., Reiner, I., Jünger, C., Michal, M., et al., (2017). "Loneliness in the general population: prevalence, determinants and relations to mental health", *BMC Psychiatry*, 17(1), 1-7.

British Red Cross and Co-op, (2016). Trapped in a bubble: An investigation into triggers for loneliness in the UK, 1-50.

Buecker, S., Maes, M., Denissen, J. J., & Luhmann, M. (2020). Loneliness and the Big Five personality traits: A meta–analysis. *European Journal of Personality*, 34(1), 8-28.

Chelune, G. J., Sultan, F. E., & Williams, C. L., (1980). "Loneliness, self-disclosure, and interpersonal effectiveness", *Journal of Counseling Psychology*, 27, 462-468.

大東美穂子・岩元澄子(2009). 青年の孤独に対する捉え方－孤独感，自己意識，精神的健

康，自我同一性との関連　久留米大学心理学研究，8, 75-84.

DiJulio, B., Hamel, L., Muñana, C., & Brodie, M. (2018). Loneliness and social isolation in the United States, the United Kingdom, and Japan: An international survey. The Economist & Kaiser Family Foundation.

Dixon, S. K., & Kurpius, S. E. R. (2008). Depression and College Stress among University Undergraduates: Do Mattering and Self-Esteem Make a Difference? *Journal of College Student Development*, 49, 412-424.

土堤内昭雄(2010). 中高年男性の社会的孤立について　NLI Research Institute REPORT, 2010(12), 30-35.

Franssen, T., Stijnen, M., Hamers, F., & Schneider, F., (2020). "Age differences in demographic, social and health-related factors associated with loneliness across the adult life span (19–65 years): a cross-sectional study in the Netherlands", *BMC Public Health*, 20(1), 1-12.

高天碩・木藤恒夫(2008). 中日大学生の独立意識と親子関係 久留米大学心理学研究, 7, 19-28.

高茵茵・王东博・闵霞・曲波(2015). 中老年人孤独感影响因素研究　中国医科大学学报, 44(6): 503-505.

Hawkley, L.C., Hughes, M.E., Waite, L.J., Masi, C.M., Thisted, R.A., Cacioppo, J.T., (2008). "From social structural factors to perceptions of relationship quality and loneliness: the Chicago health, aging, and social relations study", *The Journals of Gerontology: Series B*, 63(6), S375-S384.

Heu, L. C., van Zomeren, M., & Hansen, N., (2019). "Lonely alone or lonely together? A cultural-psychological examination of individualism–collectivism and loneliness in five European countries", *Personality and Social Psychology Bulletin*, 45(5), 780-793.

Igarashi, T. (2019). Development of the Japanese version of the Three-Item Loneliness Scale. *BMC Psychology*, 7:20, 1-8.

石田光規(2022). わが国における社会的孤立の状況　季刊個人金融(2022 年冬号), 2-9.

姜妍・岡田みゆき(2021). 日本と中国の大学生における自立の意識や実態に関する比較 北海道教育大学紀要教育科学編, 72(1), 355-365.

片岡えみ(2014). 信頼感とソーシャル・キャピタル，寛容性 駒澤大學文學部研究紀要= Journal of the Faculty of Letters, 72, 137-158.

金愛慶(2014). 家族機能から見た大学生の家族意識―日本・韓国・中国における国際比較― 名古屋学院大学論集 社会科学篇, 51(1), 81-92.

厚生労働省(2016). 平成 28 年度自殺対策に関する意識調査

劉瀟瀟(2019). 日本で一番孤独なのは"26 歳女性"だった　PRESIDENT Online, 2019 年 2 月 28 日(2022 年 10 月 20 日取得, https://president.jp/articles//27790?page=1)

Luhmann M, Hawkley, L.C., (2016). "Age differences in loneliness from late adolescence to oldest old age", *Developmental Psychology*, 52(6), 943-959.

Lykes, V. A., & Kemmelmeier, M., (2014). "What predicts loneliness? Cultural difference

between individualistic and collectivistic societies in Europe", *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 45(3), 468-490.

舛田ゆずり・田高悦子・臺有桂(2012). 高齢者における日本語版 UCLA 孤独感尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討 日本地域看護学会誌, 15(1), 25-32.

马蔚蔚(2005). 大学生孤独感及其影响因素的研究 修士論文(陕西师范大学)

Moustakas,C.E.(著)(1961). 孤独　飯鉢和子(訳)(1977)　岩崎学術出版社

村田ひろ子(2018). 友人関係が希薄な中高年男性―調査からみえる日本人の人間関係～ISSP 国際比較調査 「社会的ネットワークと社会的資源 2017」・ 日本の結果から～ 放送研究と調査, 68(6), 78-94.

Murayama H., Okubo R, Tabuchi T., (2021). "Increase in social isolation during the COVID-19 pandemic and its association with mental health: Findings from the JACSIS 2020 study", *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 18(16), 8238.

永井眞由美・東清己・宗正みゆき(2016). 在宅高齢者を介護する高齢介護者の孤独感とその関連要因 日本地域看護学会誌, 19(1), 24-30.

内閣府(2020a). 新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査

内閣府(2020b). 第 2 回新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査

内閣府(2021a). 第 3 回新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査

内閣府(2021b). 第 4 回新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査

内閣府(2022). 第 5 回新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査

内閣官房孤独・孤立対策担当室(2022). 人々のつながりに関する基礎調査（令和 3 年）調査結果の概要

Nguyen, T. T., Lee, E. E., Daly, R. E., Wu, T. C., Tang, Y., Tu, X., ... & Palmer, B. W., (2020). "Predictors of loneliness by age decade: study of psychological and environmental factors in 2,843 community-dwelling Americans aged 20-69 years", *The Journal of clinical psychiatry*, 81(6):15111.

野村総合研究所(2021). 新型コロナウイルス流行に係る生活の変化と孤独に関する調査報告

落合良行(1999). 孤独な心―淋しい孤独感から明るい孤独感へ― サイエンス社

Office for National Statistics (2018). What characteristics and circumstances are associated with feeling lonely?

大原健士郎(1987). なぜ死に急ぐ中高年（自殺者急増の背景を探る）公明 306, 164-171.

岡本純子(2017). 日本のオジサンが『世界一孤独』な根本原因　この国をむしばむ深刻な病とは？ 東洋経済 ONLINE, 2017 年 4 月 4 日(2022 年 10 月 20 日取得,

https://toyokeizai.net/articles/-/165983)

岡本純子(2018). 世界一孤独な日本のオジサン 角川新書

Perlman, D. & Peplau, L. A., (1981). "Toward a Social Psychology of Loneliness", In R. Gilmour & S. Duck (Eds.), *Personal Relationships:3. Relationships in Disorder* (pp. 31-56). London: Academic Press.

Peplau, L. A., & Perlman, D., (1982). "Perspectives on loneliness", In L. A. Peplau & D. Perlman (Eds.), *Loneliness: A sourcebook of current theory* (pp.1-18). New York: Wiley.

リクルートワークス研究所(2020). 新型コロナウイルス流行下での就労者の生活・業務環境と心理・行動―4 月調査と 7 月調査の比較を中心に―

人民网舆情数字中心・未来网・蛋壳公寓(2021). 2020 大学毕业生租住蓝皮书

Russell, D., Peplau, L. A., & Ferguson, M. L., (1978). "Developing a measure of loneliness", *Journal of personality assessment*, 42(3), 290-294.

Schug, J., Yuki, M., & Maddux, W., (2010). "Relational mobility explains between-and within-culture differences in self-disclosure to close friends", *Psychological Science*, 21(10), 1471-1478.

尚会鵬(2000). 中国人与日本人:社会集团、行为方式和文化心理的比较研究 谷中信一(訳)(2007).『中国人と日本人―社会集団・行為様式と文化心理の比較研究―』第二章「族」中の中国人と日本人 日本女子大学紀要 文学部, (57), 51-76.

Sullivan, H. S., In Perry, H. S., In Gawel, M. L., & Cohen, M. B., (1953). *The interpersonal theory of psychiatry*. New York: Norton.

Sundström, G., Fransson, E., Malmberg, B., & Davey, A. (2009). Loneliness among older Europeans. *European journal of ageing*, 6(4), 267-275.

Tafarodi, R. W., & Swann Jr, W. B. (2001). Two-dimensional self-esteem: Theory and measurement. *Personality and individual Differences*, 31(5), 653-673.

特定非営利活動法人 あなたのいばしょ(2022). コロナ下での人々の孤独に関する調査を実施～若い世代とコロナで暮らし向きの影響を受けた人の孤独感が特に高いことが明らかに～
(https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kodoku_koritsu_platform/kodoku_koritsu_platform_setsuritsusoukai/dai1/siryou2.pdf)

Townsend, P. (1968). "Isolation, desolation, and loneliness", in Shanas, E., Townsend, P. and Wedderburn, D., et al. eds. *Old people in three industrial societies*(pp.258-287). Routledge.

Victor, C. R., & Yang, K., (2012). "The Prevalence of Loneliness among Adults: A Case Study of the United Kingdom", *The Journal of Psychology,* 146, 85-104.

Vozikaki M, Papadaki A, Linardakis M, Philalithis A., (2018). "Loneliness among older European adults: results from the survey of health, aging and retirement in Europe", *Journal of Public Health*, 26(6), 613-24.

Weiss, R. S., (1973). *Loneliness: The experience of emotional and social isolation*.

Cambridge, MA: M.I.T. Press.

吴国婷・张敏强・倪雨菡・杨亚威・漆成明・吴健星(2018). 老年人孤独感及其影响因素的潜在转变分析　心理学报, 50(9):1061-1070.

Xie, Y., Kawata, Y., Kamimura, A., Shibata, N., (2021). “Comparison of Causes of Loneliness and Coping Behaviors Among Japanese and Chinese University Student Samples”, *Juntendo Medical Journal*, 67(1), 46-59.

全国大学生協連(2021). 第 56 回学生生活実態調査の概要報告

Zebhauser, A., Hofmann‐Xu, L., Baumert, J., Häfner, S., Lacruz, M. E., Emeny, R. T., ... & Ladwig, K. H. (2014). How much does it hurt to be lonely? Mental and physical differences between older men and women in the KORA‐Age Study. *International journal of geriatric psychiatry*, 29(3), 245-252.